

新撰髓腦・九品和歌と詩品

大 矢 根 文 次 郎

古今集序と六朝詩論、とりわけ梁の鍾嶸の詩品との淺からぬ關係については、先に土田杏村が「文學の發生」に於て指摘し、近くは太田兵三郎氏が「六朝詩論と古今集」のうちで論じている。私は今、古今集序の書かれた延喜五年から約百余年の後に書かれたであろう藤原公任の新撰髓腦や九品和歌と鍾嶸の詩品との關係について聊か考察して見ようと思う。

公任は和歌の理想を貫之にしていると見えて、新撰髓腦に、貫之躬恒は中比の上手なり今の人のこのむこれがさまなるべしとあるし、

風ふけば沖つ白波立田山夜半にや君が独りこゆらん
これを歌の本とすべし

ともあるが、久松潜一校定本には、橋本進吉旧蔵本・古語深秘抄本・歌学大系本等に従って、

是は貫之が歌の本にすべしといひけるなり

と傍記してある。和歌の上手と許す貫之が「手本にせよ」といったという和歌をば髓腦の真先に掲げるからには、公任は貫之を理想としてしていると断じてよく、又袋草紙上に朗詠江注を引いて

四条大納言(公任)六条宮(具平親王)被談云、貫之、歌仙也。宮云、不可及。入丸。納言云、不可然。

とあるのを見ると、いよ／＼その感を深うする。従って公任の歌論は貫之の歌論を継承していると推断しても略々過誤はなからうと考える。

さて貫之の歌論を示す古今集序が、すでに諸家の考証によって明かなように詩品を中心にした六朝歌論との深い關係を思えば、公任の撰する髓腦・九品の二書も亦その影響なしとは言い得ないものがある。先ず平安初期の漢文学隆昌の反動として延喜頃の和歌中心の文芸時代が訪れて、その極点を示す古今集が生れる頃になると、萬葉集に見られる批評的精神は一層明確になる。そして和歌が通信に代るまでに普及し流行すれば、歌合の催は一層盛になって和歌の品定がいよ／＼やかましくなつて来た。するとこの風潮に應えて人々へ和歌優劣の標準を明確に与えてやる必要が生じてくる。新撰髓腦・九品和歌という品定の專書はこうした時代的要求と使命とを帯びて生れたものである。この場合これを撰する者への時代的要求は(1)有数の歌人であること(2)古今の歌論に通じていること(3)中国文学にも通曉し、わけても中国詩論にも通じているということである。公任は最もこの要求に應え得る人であった。特に(3)の理由については、当時の平安朝文学は日本独自の文学として發展しつゝあったとはいへ、一方又中国文学の影響を根強くうけており、全然これを無視することは到底出来ない。のみならず中国文学では五言詩の

完成したのは魏晉であつて、それが賦に代つて文學的主位を占めたのは齊・梁の間にある。これと併行して老莊の自由主義が魏晉以來の思想界を風靡すると、批評の精神が勃然として起つてき、文學上でも典論・文賦・文章流別・文心雕龍などの文學論が生れてくる。然しこれ等は主に詩賦散文など文學の全分野にわたつたものであつて、五言詩のみの評論ではない。齊・梁になつて、五言詩が文學の主流となり而も声律詩の時代がくると、嘗て晉の石崇が金谷園で催したような詩會が頻りと催され、又世説新語の文學篇に

顏延之嘗問鮑明遠曰詩與謝康樂優劣。鮑曰謝五言如初發芙蓉、自然可愛。君詩若錦繡列繡、亦雕績河眼。

とあるような五言詩の優劣を品定する風が益々盛となる。その結果当然五言詩品定の書が生れねばならなかつたと思ふ。詩品はこうした時代の必然的要求から生れたのであると思ふが、更に沈約・謝朓らの創始した声律詩をうけつぐ人々の間では、とかく形式（声律）のみに抱泥して詩本来の姿を忘れる傾向が多かつたので、これを是正する意図をも含めて詩品が撰せられたということを先ず考へておきたい。

さて公任が和歌品定の書をものしよとする時、中国の詩論をも参考にしようとするれば、以上のような性格の類似からも詩品を選ぶのは蓋し当然のことと思われる。公任が和漢朗詠集を撰する程の漢文學者でもあることを思うと髓腦九品の二書と詩品との間には深い關係のあることを一層予想させてならない。この事は両者を比較検討することによつて更に一層明瞭になる。

構成上よりの比較

(1) 詩品は総論的な序の部分と各論的な上品・中品・下品の両部から構成されている。序については歴代詩話

本と漢魏叢書本・龍威秘書本とであつかい方が違っている。詩話本では巻頭の「氣之動物」から「文彩之鄧林」までの千八百六十二字を序として上品の前に置くが、但し「均之於談笑一耳」までを一段、「一品之中」より「請寄知者爾」までを二段、「昔曹劉」から「文彩之鄧林」までを三段としているのに対し、叢書本などでは詩話本の一段をば上品の序とし、二段を中品の序、三段を下品の序に分置してある。そのいずれが鍾嶸の原形に近いかは遽かに定めかねるが、中品序といわれる部分の「一品之中、略以三代爲先後、不以優劣爲詮次。」とか、又その末尾の「陸機文賦……嶸今所録、止於五言。雖然網羅今古、詞文殆集、輕欲辨彰清濁、捨摛病利。凡百二十人。預此宗流者、便稱才子。至斯三品、升降差非定制、方申變裁、請寄知者爾。」とかは、当然上中・下三品全部にかゝるべきもので、中品のみの序とするのは当らない。従って、序は一纏にして上品の前に置く詩話本の体裁が恐らく原形に近いのではあるまいか。

さて一段では（イ）詩の起源（ロ）五言詩の歴史（ハ）四言詩五言詩の優劣（ニ）五言詩の上々なるもの（ホ）詩の效用（ヘ）当時の五言詩の傾向（ト）詩品誕生の由来を叙し、二段では用事の排すべきことを主に、三段では声律詩病の重んずるに当らないことを主にして構成している。各論の部分では、上品に十一名（外に古詩十九首を含む）、中品三十九名、下品七十二名計百二十一名をば選定し、これに批評を加えている。

然らば新撰髓腦と九品和歌は如何であろうか。前者の現行本が零本であろうということはすでに久松潜一氏の指摘する所であり、これは確論と思われる。現行本の髓腦の構成は初から「これらなんよき歌のさまなるべき」までが一段で理想的な和歌を主に述べたもの、「ことをあまたある（歌の病を多くいふ）中に」から「一ふしにてもめづらしきことばをよみいでむと思ふべし」までが第二段で、専ら歌病を説いたもの、「古歌を本文にして」より以下

が三段で主に本歌取について言ったものと見られる。又九品和歌は詩品の各論的な部分と同様に上・中・下の三品に分けたものを更に各品毎に品定の標準を示して、その標準にかなう歌二首づつを挙げてゐる。

今髓脳と詩品序とを圈点しておいた所に着目すれば、「本歌取」が「用事詩」に呼応し、構成の順序が歌病と前後するちがいこそあれ、殆どその構成を一にするといつてよいと思う。又九品と詩品の各論的な部分とをつき合せると、一は九品、一は三品とちがい、一は和歌を挙げ、一は詩人を挙げたちがいこそあれ、その構造の類似に驚かざるを得ぬ。

よつて構成上より見ると、新撰髓脳は詩品の序に相当し、九品和歌は詩品の三品に相当するという見方も成立するのではなからうか。そしてこれを裏返しすれば、髓脳は九品の前序的性格を持つものということにもなるかと思ふ。従つて公任のこの二書は詩品を充分に消化したのち暗々裡にこれに倣つて作つたということ、換言すれば詩品を換骨奪胎したものといふとひどく曲論であらうか。

内容上よりの比較

(1) 上品の詩歌は文(形式)と質(内容)との彬々たるものである。

言葉たえにしてあまりの心さえあるなり (九品和歌上品上)

心ふかく姿きよげにて心おかしき所あるをすぐれたりというべし (新撰髓脳)

一曰興、二曰比、三曰賦。文已盡而意有餘興也。因物喻志比也。直書其事、寓言寫物賦也。弘三義、酌而用之、幹之以風力、潤之以丹青、使味之者無極、聞之者動心。是詩之至也 (詩品序)

陳思王……骨氣奇高、詞彩華茂、情兼雅怨、體被文質、察溢古今、卓爾不羣。嗟乎、陳思之於文章、也、譬人倫之有周孔、鱗羽之有龍鳳、音樂之有琴笙、女工之有黼黻。（詩品上品魏陳思王植）

髓腦と九品とでいう所の「心」は内容であり、「言葉」「姿」は形式をさしているから、公任は和歌の理想を内容と形式の調和している所においているといえる。然らば詩品はどうであろうか。彼は比賦興の程よき使用と風力と丹彩とを具備しておるのを以て最上の詩と見ている。比賦興については、古來諸説紛々たる所であるが、要するに主題を如何に表現するかの方法をいっただもので、形式内容と別ける時は前者に含められる。もっとも、序には若専用比興、患在意深、意深則詞蹶。若但用賦體、患在意浮、意浮則文散。

とあるから、比興賦は意即ち内容を指すかの様にもとれるが、實際はそうではなく、比興賦の表現方法を用いると内容を或は深遠に或は淺薄に感じさせるといふのであろうから、比興賦は則ち意、内容とはならないで、矢張表現形式を意味するものと考える。丹彩とは字句上の美即ち修辭をいっただものと思われるから、此も形式を意味していると思う。次に風力とは何か。私は文心雕龍にいう風骨の義に同じだと考える。即ち風骨第二十八には

詩總三六義、風冠二其首、斯乃化感之本源、氣之符契志也。是以悵悵述情、必始乎風、一、沉吟鋪辭、莫先於骨。故辭之待質、如二體之樹骸、情之含風、猶三形之包氣。……故練於骨者、析辭必精、深乎風者、述情必顯……昔潘勗錫魏、思慕經典、羣才翰筆、乃其骨體峻也。相如賦二仙、氣號凌雲、蔚爲辭宗、迺其風力逾也。

とあって、風と情との不離一体であることが知られるが、情については同じく雕龍の体性篇に夫情動而言形、理發而文見。蓋沿隱以至顯、因内而符外者也。

といて、内容質実な情と理との二面のあることを明確に説いている。故に風力とは内容即ち質実について言った

ものにまちがいはない。以上のことからすれば、鍾嶸が最上とする詩は、文と質の彬々たるもの、換言すれば形式と内容との調和のとれたものであることに疑義はない。上品で陳思王の詩をば、人類に周公孔子ある如く、魚鳥に龍鳳といった存在だといって絶讃しているのも、つまり骨詞情彩を兼ねて文質彬々たるがゆえである。

さて文質彬々たり得ない時は、一体文と質のいづれを重んじようとするのであろうか。公任は心すがたあひぐする事かたくばまづ心をとるべしつひに心深からずば姿をいたはるべし（新撰髓腦）

といっているから、姿よりも心を重んじ、内容の深さの望めない時には形式をとった。この点でも詩品は全く前二書と同一であって、

次有_二輕薄之徒_一、笑_二曹・劉_一爲_二古拙_一、謂_二鮑照義皇上人、謝朓今古独歩_一、而師_二鮑照_一、終不_レ及_二日中市朝滿、學_二謝朓_一劣。

（詩品序）

という。曹植や劉楨は上品中でも古今独歩と賞讃されておる代表詩人であり、なかんずく劉楨は

仗_レ氣愛_レ奇、動多_二振絶_一、真骨凌_レ霜、高風跨_レ俗。但氣過_二其文_一、雕潤恨_レ少。然自_二陳思_一已下、楨稱_二獨歩_一。（上品）

と評せられる程に質に於て優る人である。この人々を古拙とあざわらう輕薄の文士たちが理想と慕うのは、鍾嶸が至_二平上去入_一則余病_レ未能、蜂腰鶴膝、閭里_二已具_一。

と斥けきらう四声々律派の謝朓たちである。彼等は時代の浪に乗って形式（声音のみ）の唯美を追う人たちが崇敬する所であるから、鍾嶸が時弊を矯める上から意識的に強調した点もあつたろうが、兎に角、文よりも質を重んじていたことはこれでも窺い知ることが出来る。さて劉楨の後に王粲を上品に加えて「文秀而質羸」と品定している。これはまた、質がもしも望めない時には文にまさるものを取るといことをば、新撰髓腦ほどに明確ではない

が順位づけたものと考える。

(2) 性情を素直に詠んだものをよしとする

事多く添くさりてやと見ゆるがいとわろきなり一筋にすくよかになんよむべき (髓)

氣之動レ物、物之感レ人。故揺レ蕩、性情、形、諸舞、詠、照、燭三才、輝、麗萬有、靈祇待レ之以致レ變、幽微藉レ之以昭告。動、天

地、感、鬼神、莫、近、於、詩、(詩品序)

凡斯種種、感、蕩、心、靈、非、陳、詩、何以展、其、義。非、長、歌、何以、騁、其、情。故曰、詩、可、以、羣、可、以、怨、使、窮、賤、易、安、

幽居靡、悶、莫、尙、於、詩、矣 (〃〃)

夫屬詞比事、乃爲、通、談。……至、乎、吟、詠、情、性、亦、何、貴、於、用、事。觀、古、今、勝、語、多、非、補、假、皆、由、直、尋。

新撰髓腦では和歌の本質論に觸れてはいないが、古今集を奉ずる公任であるから、古今集真名序に述べている詩

歌の本質論の

夫和歌者託、其、根、於、心、地、發、其、華、於、詞、林、者、也、人、之、在、世、不、能、無、爲。思、慮、易、遷、哀、樂、相、變、感、生、於、志。詠、形、於、言。是

以逸者其聲樂、怨者其吟悲、可、以、述、懷、可、以、發、憤。

を是認した上での立言であろうと推定して誤りはなからうと思われる。これから推せば公任は、和歌は性情のままに素直に詠むべきものと定めていたと考えてよい。所で鍾嶸は前にあげた例で明かな通り、詩は性情を揺蕩し、騁せるものであるから、よろしく性情のまゝに素直に吟詠するのがよいのだとする。これはともに次に述べる用事過多の時弊を矯めるために詩歌の出発に出戻れというのでもあろう。いづれにしろ相似の言に驚く。

(3) 用事の過多を排す

古歌を本文にしてよめる事ありそれはいふべからずすべてわれはおぼえたりともおもひたりとも人の心得がたき事はかひなくなんある
(新撰髓腦)

若乃經国文符、應_レ資_二博古_一、撰_レ德_レ駿_レ奏、宜_レ第_二往_レ烈_一、至_二乎_一吟_二詠_レ情_レ性_一、亦何_レ費_二於_レ用_レ事_一。(詩品序)

髓腦では古歌をふまえた和歌、即ち本歌取の歌は、相手の理解の可能も不可能も考えない独りよがりて、術学的な悪趣味であるから詠むまじきものというのである。この点詩品も全く同一であつて、經国の文章や撰_レ德_レ駿_レ奏の文ならば、經史に典拠する必要もあるうが、情性を吟詠する所の詩に何で用事が必要があるうか。「思_レ君_レ如_二流水_一」や「高台多_二悲_レ風_一」は、ただ目にふれて感じたまゝをうたったまで、「清晨登_二隴_レ首_一」や「明月昭_二積_レ雪_一」には何の故事も典拠もない。古今の勝語は皆性情を素直に詠ったに過ぎず、大抵古典や古詩からの仮りものではない。ゆえに

近任昉・王元長等、辭不_レ貴_レ奇、競須_二新_レ事_一。(序)

任昉博物、動輒用_レ事、所以不_レ得_レ奇。少年士子、效_二其_レ如_レ此_レ弊_レ也。(中品、梁太常任昉)

と難_レずるもの、皆この用事過多な當時の詩弊を矯めんとするに外ならぬ。そうは謂うものゝ鍾嶸は用事を全面的に排除しようとするのではないことは、用事の過多を戒めた直ぐ後で

但自然英旨、罕_レ值_二其_レ人_一。詞_レ既_レ失_レ高、則_レ宜_レ加_二事_レ義_一。雖_レ謝_二天_レ才_一、且_レ表_二學_レ問_一、亦_レ一_レ理_レ乎。(詩品序)

といっている。性情を直尋する興趣ある詩は萬人に望まれぬから、そこに事義(用事)の必要が生じてくる。すなわち、謝靈運のような天才詩人に於てさえ、事義によって学問の深さを示しているのもこのゆえであるという。要するに鍾嶸は用事を一応は承認しつつ、しかも

遂乃句無_二虚語_一、語無_二虚字_一、拘擧補納、謚文已甚。
 というような極端なその濫用を斥けたものである。

(4) 病について

一字二字のあまりたりともうちよむに例にたがはねばくせとせず

ことあまたある中に(校本には「歌の病を多くいふ中に」と傍記す)むねとさるべき事は二所におなじ事のある也。心となるは去るべからず。ことばことなれども同じきは猶去るべし

又ふた句に末に同字あるは世の人みな去物なり。句の末にあらね共ことばの末にあるは耳にとまりてなむきこゆる句をへだたらでもさらざらむよりはおとりてきこゆる物也。《校定本には橋本本・深秘抄本・歌学大系本にないことわつて、次の六十五字を続群書類従本に従つて加えている。(此義は初句と第二の句の末の同じ字はさのみの病ならず句をへたてゝ第一の句の末第三の句の末の同字を禁することは也第三の句の末の字本韻也)》

齊有_二王元長者_一。嘗謂_レ余云。宮商_二儀俱生……王元長創_二其首_一、謝朓沈約揚_二其波_一。三賢或貴公子孫。幼有_二文辨_一。於_レ是士流景慕、務爲_二精密_一、鬢積細微、專相凌架。故使_レ文多_二拘忌_一、傷_レ其真美。余謂、文製本須_二諷讀_一、不_レ可_二蹇礙_一。但令_二清濁通流、口吻調利_一、斯爲_レ足矣。至_二平上去入_一、則余病_レ未能。蜂腰鶴膝閭里已具。故_二三祖之詞_一、文或不_レ工。而韻入_二歌唱_一。此重_二音韻之義也_一。與_二世之言_一宮商_二異矣。今既不_レ備_二管絃_一。亦何取_二於聲律_一耶。(序)

右の文からすると、いかにも公任と鍾嶸の詩歌の病に關する考が対立しているかに見える。即ちこゝだけの文からすると、公任は表現上で和歌の病を認め、鍾嶸はこれを否定しているからである。鍾嶸の意見によれば、「謝朓沈約王融らの創始した四声応用の声律詩は、近頃大流行するものゝ、詩病を説いて詩本来のよさを傷けている」。詩

は元來諷詠（誦）すべきもので、歌われるものではない。若し歌われるもの、即ち楽歌されるものであるならば音韻を調えるという必要もあろうが、今のようにたゞ暗誦されるだけの詩に何で声律を八ヶ間敷くいう意味があるか。要はたゞ口誦して流暢であればそれでよい。平上去入は自分には分らないが、蜂腰（第五字と第十五字と同声なるを得ず）鶴膝（同一句内で第二字と第五字とは同声なるを得ぬ）などは、つまり田舎ものゝいう事であるといつて声律詩病に反対している。これは公任が「一首の歌の中で同じことばを二度つかつてはならぬ」「第一句末と第二句末の同字は病」「第一句末と第三句末の同字は巨病」などといつて、和歌の病を認めるのと全く反対の考え方で、寧ろ公任の歌病は沈約たちの詩病に類似しているといふべきであらう。

然し、私はこう思う。鍾嶸の真意は詩病悉くを否定したものでなく、自然に備わる声律の美——それをねらう声律詩は寧ろ肯定しているのだと。その証拠にこの派の始祖ともいふべき沈約や謝朓らをば中品の列に加えているし、特に鍾嶸はこの書で沈約に対する私憾をはらしたと伝えられるが、それならばなおさら沈約謝朓らを下品におとすであらうと思われる。それを中品に加えた所に声律に対する彼の真意が那邊にあるかを窺い得ると思う。つまり、こゝでも鍾嶸の意図は謝朓や沈約の唱える声律詩に徒らに附和雷同する軽薄な時人の弊を矯めようとする所にあることを看取することができる。

この見方が許されるとするならば、公任と鍾嶸の意見は必ずしも対立するものではないといふことになる。否、寧ろ鍾嶸さえも認めざるを得なかつた沈約らの詩病をば公任は自家薬籠中のものにし、その上に立つて歌病を説いているといつてよい。

以上、新撰髓腦や九品和歌と詩品との性格と、構成及び内容の三方面から検討してみると、これらの間には仲々密接なつながりのあることを認めざるを得ないのである。勿論公任が詩品を全的に学び取ったものでないことは、例えば九品の上品上に

これは言葉たへにしてあまりに心さへある也

とあるのや、又上品中に

ほどうるはしくてあまりの心あるなり

とあり、「あまりの心」すなわち、余情を強調しているのでも自ら明瞭であろうと思う。

結局、公任は当代第一級の歌人であり和歌評論家であり、又和漢朗詠集を撰するほどの該博な大陸文学の理解者である。従って、この二書を撰するに当って彼我前代の詩歌論は悉く参考にしていようが、特に中国最初の詩評である詩品をも熟読玩味し、そのうらづけを得て一層自信を以てこの二書をものしたものと考える。